

《Seiryō's Global Commons: An Uncommon Experience》

国際性と言語

日野 拓真[†]

グローバル化が進む中で、「国際派の人々」は自国のアイデンティティについても取捨選択するのか。

私は大学1年次の冬にハンガリーへ留学した。率直に言うと留学前は国名と首都と国旗以外には何もイメージが思い浮かばない地であった。出発前夜は、緊張のあまり一睡もできなかった。ブダペストにあるコドラーニヤーノシュ大学では、観光学やEU加盟国ならではのグローバル化に関する問題について学んだ。また、学校では教員や学生を含め唯一のアジア人という状況も経験することで、言葉にし難い程の非常に大きな刺激を受けて帰国した。留学中もその後も様々な国を旅行し、世界を狭く身近に感じるようになった。しかし、留学後それまでに得たせっきくの経験を活かす場がなく、なんだか手持ち無沙汰のような毎日を過ごしていた。将来の何かしらの役に立つと思い、資格の勉強を始めてみたが、何かが違うと感じた。そんな時、石川県の事業である「いしかわ国連スタディ・ビジットプログラム」に出会った。毎年2月に、ニューヨーク・マンハッタンに所在する国際連合本部において11日間の研修が提供されるプログラムだ。

私は幸運なことに2018年度の第10期派遣学生として内定した。予てより労働問題に関心があったので、ILO国際労働機関のNYオフィスでのブリーフィングが、この研修の自分のハイライトとなるのだろうと思い込んでいた。だ

が、講義を受けていく中で「言語と不平等」という問題に関心を持つようになった。

さて、冒頭で述べた「国際派の人々」を、私は多くの場合偏見により生み出される異文化への抵抗感が限りなく少なく、そして寛容的な人々のことと捉えている。経験上、海外を見たことのない人には偏見を持ち合わせる人が少なくないように感じる。そして私は、この自身の属するコミュニティの文化も異文化と同様に平等に尊重できる国際派の人々を、国際性を持ち合わせた人々であると定義したい。この国際性の備わる人が増えるにつれ、グローバル化は進行するのではないか。グローバル化は自国のモノ、他国のモノに関わらずいいとこ取りをすることで成立すると考える。国連での研修へ向かった道中、飛行機から見下ろした夕焼けのマンハッタンは美しかった。私はきっとキラキラしている場所なのだろうと期待で胸をふくらませていたが、いざ降り立ってみると、今まで訪れた国と何ら代わり映えしなかった。人や建物、食べ物の見た目は勿論十国十色といった感じで国により違いはあるのであろうが、私には全く真新しさのない、いつもと同じ風景にしか映らなかった。出国地、東京となんら変わらないではないか、と。我々の想像する以上にこの世界はグローバル化が進行している。そう映ったのは恐らく私自身のこれまでの異文化経験が最大の要因であると思うし、そもそも周りの人たちよりは寛容な人である（と自分では信じて

[†] 3rd year undergraduate, Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryō University

いる) ことも関係していると思う。そのような私を、国際派の人であると思いたい。

ハンガリーでの留學生活や国連での研修を経て、私の国際性は入学時と比べると随分と養われた。海外が身近になった現代において、私と同様に国際性を持ち合わせる人々は増え続けているのだろう。だが、我々の手の届かないところで進行し続けるグローバル化社会で、国際派の人々が異文化に寛容すぎたとき、我々が尊重すべき文化が失われるのではないか。文化は先人たちがつくり上げ、その地での生活に最適化されているものだ。確かにグローバル化はハ

ンガリー語話者のようなマイノリティにより多くの可能性を提供する。しかしそれは、言語のように自国の重要なアイデンティティまでも取捨選択する理由になり得るのか。国際性の備わった人々が増えることにより、言語は単一化する運命にあるのかもしれない。国際性と自国文化の尊重という一見すると相反する考え方は、グローバル化が与える文化への影響を大きく左右する。文化は常に変化し続けるものではあるが、どうかその土地ならではの文化や言葉が消えないでほしいと願う。